

第54回
平成30年度

全入選作品選評

「わたしの教育記録」特選作品発表！

今年度の「わたしの教育記録」特選作品を発表します。
その前に4人の審査員の方々から、入選作品についての選評を伺いました。

日々の積み重ねの中から
独創的な実践が生まれていくことを示す論文群



東京大学大学院
教育学研究科教授
秋田喜代美さん

第54回も、現代に必要とされている教育課題に対する、その先生ならではの目の前の子供たちへのよりよい教育をという思いから生まれた、創造的な実践の記録が数多く寄せられ、その中から珠玉の記録が受賞をされた。

特選に選ばれた「視覚的教材を活用した計画的・効果的な生徒指導を目指して」の山内裕美実践は、生徒指導の取り組みを長期的計画的に考えた実践を実施しているということとともに、そのために使用する教材として視覚化できるカード等を、自らイラストも描いて作成された点でも特徴的な実践であった。ICTの発達とともにネット等からのコピー的なものが増える中で、その教師自らが、担任クラスの子供たちのことを考えて作った手

作り教材の温かみとよさを感じることができたものであった。子供たちが惹きつけられて主体的に考えようとするであろうという、感覚を触発する教材を日々の生徒指導の中で使えるものとして考えた点でも、インパクトがある記録と教材であった。

また、特別賞「『特別の教科 道徳』の可能性」の田村由宏実践も、教科道徳の始まりにおいて、どうしても特定の型やパターン化しがちな内容について、深く考えるための授業展開の手立てを構造的に試みた点で評価できるものであった。

その他人選4編、新人賞1編においても、「主体的・対話的で深い学び」の具体的な実践であることが、教師が何をしたかだけでなく、

その背景にある教師の明確な課題意識や思いと、実際に子供たちの声や活動、あるいはその流れの過程の記録が、実践の事実として丁寧に記されていることが共通していた点であると見える。

子供たちが主体的に取り組み深く学ぶためには、教師自らも教科や教材に深く関わり理解して授業をデザインしていくこと、また、それを実施するのみならず振り返り丁寧記録しておくことが、新たな実践を展開していく上で必要であることを示す内容であった。

このように、今回の受賞論文は、日々の積み重ねの中に独創的な実践が生まれていくことを明確に示した論文群であった。

新学習指導要領の実施に向けた 着実な取り組みが見られ心強い

日本の教育の進むべき方向を見据え、着実に実践に取り組んでこられた記録を、今年も数多く読ませていただいた。美しい言葉やスローガンに振り回された感のある上つ滑りなものは非常に少なくなっている。日本の社会

も教育も新しい展開を迫られている時期であるだけに、教育の王道を着実に進んでおられる教師の方々の存在を如実に感じることができ嬉しい。特に、若い方々の取り組みに光ったものが多く見られ、日本の教育界の今後に大きな期待を持たせていただける感があった。

特選の山内裕美さんは教職経験6年の若々

しい教師であるが、生徒指導の改善改革を試

行された記録には、日常生活に密着した指導の在り方について多様な工夫が見られ、他の教師にも参考になる点が少なくない。

特別賞の田村由宏さんは教職経験11年、なかなか議論の多い「道徳」について指導の工夫をされた記録であり、非常に着実な取り組みに好感が持てる。

小学校からは、教職経験5年の北野梓さんの韓国の子供たちとの交流を通じた外国語活動の記録、教職経験14年の古屋雄一朗さんの修学旅行での外国語活動の記録、教職経験19年の甲斐淳朗さんの単位数に関する算数科授



元兵庫教育大学学長
梶田 叡一さん

業の工夫の記録が入選となった。いずれも入念で着実な取り組みである。また、中学校からは教職経験8年の奈良大さんの探究的な理科学習の取り組みの記録が入選となった。仮説実験授業を提唱して理科教育の改革に大きな一石を投じた板倉聖宣さんを思い起こさせる優れた記録である。

新人賞の田中咲也子さんは教職経験3年、アサガオに子供たちが各自の「思い」を持つて関わった記録は、初々しさフレッシュさが感じられ、好ましい。選外になったが、藤原友和さんの「道徳」の授業づくりの記録は、なかなか入念であり、印象に残るものであった。

新学習指導要領への移行に確かな手ごたえ

今世紀に入って3度改訂された学習指導要領の趣旨が、着実に浸透しつつある。今回の実践記録からそんな印象を強く受けた。

山内裕美氏の「視覚的教材を活用した計画的・効果的な生徒指導を目指して」(特選)は、「悪いことをしたから叱られる」生徒指導を、

「どうすれば良かったのか分かる」ものへと変革させる地道な取り組みである。

クラスのみんながルールを共有できるカードや、何をすべきか考える「ふり返りコミック」、「行動決定カード」のイラストの出来栄はなかなかのものだ。他の教員や保護者と



元読売新聞論説委員
永井 順國さん

も事実の共有ができたこと、それに「教室の居心地がよくなった」という小6の子供の反応が、何よりの成果だろう。

田村由宏氏の「『特別の教科 道徳』の可能性」(特別賞)は、5、6年生を対象に、ズレを引き起こす発問で対話と議論を深める授業

実践である。

「えっ」「おかしいよ」「どっちだろう」「でも……」「私だったら……」という、子供たちの価値観のズレが、考え・議論し・伝える道德へと発展する。脱「シラケる道德」の一つの見本がここには見て取れる。

古屋雄一朗氏と北野梓氏の入選は、「主体的に学ぶ外国語学習」の実践に挑戦した結果だ。修学旅行先で外国人観光客へのインタビュ

創意工夫のある教育記録が魅力

教育実践は創意工夫が新しい世界を拓きます。子供のためにという熱い気持ちから生まれるからです。入選の教育記録は、日々の取り組みと教室の姿がよく分かりました。

特選の山内裕美先生の「視覚的教材を活用した計画的・効果的な生徒指導を目指して」は、大小を問わず毎日のように起こるトラブル、そして生徒指導の現状を子供たちの成長の支えにしたいという強い気持ちが生み出した実践です。生徒指導の持つ負のイメージの変革を目指したカード化・スケージング定規・ふり返りコミックなどの具体的な方法を生み出した手堅い実践でした。

特別賞の田村由宏先生の『『特別の教科 道徳』の可能性』は、道徳の時間が楽しくな

や、韓国の小学生との英語・韓国語による交流をセツトすることで、「必然性のある状況」をつくることに成功している。

甲斐淳朗氏の『「単位量あたり」の理解を深める算数科授業の在り方』（入選）は、算数にも言語活用力を駆使することで、子供たちの苦手意識を克服させる試み。目を開かれる思いを味わった。

奈良大氏の「主体的に探究する態度を育て

いと感ずる割合が高いことに問題意識を持ち、「考えたい・伝えたい」という授業を求めた実践記録です。発問に着目し、解決の方向が子供の発言の中にあることに気付いた過程と、丁寧な授業の記録が印象的でした。

入選4編のうちの古屋雄一朗先生は、外国語は将来役に立つという有用性を感じさせることを目的に、修学旅行で外国人観光客に対してインタビュ活動を学習です。過去2年間の積み上げを生かし、外国人に日本文化を紹介しようという課題を持って行動をする子供たちの様子がよく分かりました。甲斐淳朗先生は、6年の算数科「単位量あたりの大きさを求める除法の式と商の意味を理解できている児童が少ない」という課題に対して、

る理科学習（入選）は、なぜ？ から始まる「科学の芽」を「科学の茎」に、そして「科学の花」につなげる観察・実験・討論の手法が興味深い。授業実践の大きなヒントになるだろう。

新人賞となった田中咲也子氏の「みんなでぐんぐん！『あさがおー!! かいぎ』」は、朝顔を育てる中で感じた喜び・疑問・悩みのやりとりが手に取るように伝わってくる。このフレッシュな感性をさらに磨いてほしい。



元京都女子大学教授
吉永 幸司 さん

段階的に慣れる指導から「あたり」の意味の理解、数直線で比例関係の定着を図る方法を生み出した授業改善の道筋がよく分かりました。北野梓先生は、外国語活動において目標（ゴール）の確認とレベルを設定し、自己評価を生かした巧みな授業構成が成果を上げています。奈良大先生は、レインボーウオーターやオリジナル万華鏡の説明書を作ることを目的に、理科の学習をする生徒の生き生きとした様子がよく伝わってきました。

新人賞の田中咲也子先生は、生活科の朝顔を育てる学習で、一人一人の気付きや成長を丁寧にとめた記録です。これからの実践に期待します。